

麦の郷

通信

“麦の郷とは” 住民のニーズから
生み出され、住民の手によって育てられる

September 2024

こじか園/第二こじか園/はぐるま共同作業所/はぐるま共同作業所 和の社/はぐるま共同作業所 ラ・テール/麦の郷印刷/ソーシャルファームピネル/おぎピース/ソーシャルファームもぎたて/meglück(メグリユック)/六星舎/叶夢向/麦の郷 和歌山生活支援センター/麦の郷 紀の川生活支援センター/障害者就業・生活支援センター つれもて/くろしお作業所/麦の郷訪問看護ステーション/麦の郷居住福祉事業所/ハートフルハウス 創/事務所/ゆめ・やりたいこと実現センター/ちいき暮らしサポートセンターわかやま/Rework支援センターANEW/麦の郷障害者地域リハビリテーション研究所

揮毫：伊藤静美

発行/麦の郷情報管理委員会
〒640-8301 和歌山市岩橋643

TEL(073)474-2466 FAX(073)474-4637
<http://www.muginosato.jp>



ハートフルハウス創
7月27日(土) 粉河祭り



くろしお作業所
7月30日(火) 夏本番! 水遊び!



紀の川生活支援センター
7月30日(火) 名手病院にて販売



私たちのめざすもの ~麦の郷4つの理念~

- 1). 麦の郷は、日々学び、育み、発信し続ける人材を育成し、地域福祉の発展を目指します。
- 2). 私たちは、ものづくりを通じて障害のある人と地域の共存を実現し、互いに豊かになる実践を目指します。
- 3). 私たちは、社会的不利の状態におかれている人々の課題を解決するために、広範な人々をつながりを深め、ともに社会変革をめざします。
- 4). 麦の郷は、全ての人々が平和で安心して暮らせる社会づくりのために人の輪を紡いでいきます。

精神医療は変わるし、変えられる？！



去る6月29日、麦の郷障害者地域リハビリテーション研究所の主催で、氏家憲章さん（元日本医療労働組合連合会精神病院部会長）を招いての講演会が行われました。参加者は福祉分野のスタッフ中心に30名程で貴重な学びの場を共有することができました。医療分野の関係者が少なかったことが残念です。

講演内容は、「転換点に立つ日本の精神医療！精神医療の展望をどう切り拓くか？精神医療は変わるし、変えられる！」をテーマに、氏家さんが精神医療の現場で実践や運動を積み重ねてこられた成果と今後の展望をととても熱くご教示してくださいました。

講演の一部を紹介すると、精神医療が入院中心で地域医療に転換できないのはなぜか？という点です。日本は先進諸国で唯一精神科病院への入院中心（施設へ隔離・収容）の精神医療政策を長年継続しています。その背景にはいくつかの原因があるとのこと。第一が「社会防衛的視点に立つ国の精神医療政策」で、精神疾患を危険視し1900年の「精神病者監護法」以来精神障害者は社会の害と称され私宅監置を含めた社会から隔離されてきた歴史と今日の「精神保健福祉法」になっても100年以上基本姿勢が変わらない事実があること。第二が「安上がりの精神医療」で、他の先進諸国と違って膨大な精神病床（全疾患の在院患者の4人に1人）でも国の財政問題を生じないため、政府は精神病床の大幅削減の必要性を感じていない状況があるとのこと。氏家さんは、安上がり精神医療が当事者と家族そして精神科病院の医療従事者の犠牲の上で成り立つ国の医療政策であり、国民の健康・命・人生に直結する医療政策が「安かろう・悪かろう」を基本としていることが間違いであると指摘しています。第三が「欧米諸国と違って民間病院中心の日本」で、日本の精神病床の9割が民間病院、先進諸国では精神病院の多数が公的病院であったことが入院中心から地域

ケア中心への精神医療へ政策転換が進んだ大きな要因であったとのこと。第四が「日本は改革のいくつかのチャンスを逃してきたこと」、第五が「重い家族の扶養義務」で民法第877条の「扶養義務制度」に大きな課題があること。第六が「法の見直しは不祥事が契機」で、宇都宮病院事件や大阪池田小学校児童殺傷事件などを契機に小手先の法改正に留まり、先進諸国のように精神医療の進歩に対応し入院中心の精神医療を反省し本格的な見直しに動くことは一度もなかったこと。氏家さんは、日本では医療機関や家族そして社会も「病気を治すこと」＝「薬と入院」という考え方（医療モデル）から抜け出せていません。先進諸国のように精神の病気や障害があっても「地域で支えながら当事者の願いや目標を支援する」というリカバリーの考え方（社会モデル）が浸透しにくい現状があり、世界標準の精神医療である「社会モデル」の考え方への転換の必要性を主張されています。

最後に、氏家さんは、人は誰でも病気になった時、その時代の最善の治療や処遇を望んでいる。しかし、日本の精神障害の当事者や家族はこの当たり前の願いにほど遠いのが現状で、この原因が精神疾患に問題があるのではなく、日本の精神医療政策が大きく立ち後れていることに問題があり、問題の解決には国の精神医療政策の転換（改革）が不可欠であること。また、日本の精神医療を変えるためには、先進諸国の精神医療や国内の一般医療との「二重の格差（後れ）」の解消に向けてみんなで大同団結し行動に踏み出す時であり、一人ひとりの力の“微力”ですがみんなで取り組むなら変革の大きな力を発揮すると、共感と運動の連帯を呼びかけました。そして、その共通のツールとして、氏家さんの著書「精神医療は変わるし変えられる その道筋と改革の展望」（麦の郷出版）の普及が欠かせない、共に学びながら前進していきましょう！と訴えていました。

（麦の郷障害者地域リハビリテーション研究所 鈴木 栄作）



お問い合わせ等は麦の郷印刷まで
Amazonにて販売中

新連載

日々是雑感

①追想：みちさんのこと

今年5月末に70歳になりました。古希となったのですが、今では、古希は、古代希なことでもないようです。「まだ若いから頑張ってください」と励まされることが多い、今日この頃です。

今回から、「私の半生と障害者問題や障害者運動」について記すように麦の郷の情報管理委員会から依頼がありました。この「半生」には、「それまでの人生」という意味があるようです。そこで、私が、障害者問題と出会ってから今までのことを考えていこうと思います。

紀北のある町に私の故郷がありますが、改良事業の為に生まれ育った家はありません。それに、墓じまいも行ない、めったに帰ることはありません。今、思い返せば、幼い頃、その村の道沿いで「立ちしょん」をする女性（みちさん：仮名）に出会い、「不思議だな」との思いをもったのが、人生で最初の障害者問題との

出会いです。ある日、両親に「あの人は、男の人が見ているのにどうして“立ちしょん”ができるの？」と聞いたことがあります。

両親は、「あの人は特別なんや」と私を納得させていました。同じ在所にあった祖父母宅を訪れる時、みちさんの家の裏を通るのですが、そこを通る時、いつも「くさい」と思っていました。どうして「くさい」のかは分からず、「みちさんは、特別やからな」と自分を納得させながら大きくなってきました。

みちさんは知的障害があり、しかも、家族が苦勞してきたことを正しく知ったのは、大学に入学してからです。彼女のことを知りたいと思い、地域の人にインタビューした時には、誰も話してくれなかったのですが、彼女の親類であり私の同級生が、母親に聞いたことを話してくれたのです。みちさんの家族の苦勞は、後にお話しします。（理事長 山本 耕平）次号へ続く

2024年度の新人職員研修を終えて



7月4日（木）と18日（木）の2日間に新人職員研修を行い、今年は10人の新人職員が参加しました。7月4日（木）には、鈴木栄作統括部長が「麦の郷で働く職員として必要なものとは？」というテーマで講義しました。仲間たちの働いている姿の写真や新聞記事などの資料をもとに、麦の郷のあゆみやめざすもの、発達保障、制度の矛盾、実践と運動について学びました。7月18日（木）には、山本耕平理事長が「重度知的障害の多田くんからの学びー権利は運動する者の手にあるー」というテーマで講義しました。山本理事長が学生時に多田くんや多田くんのお母さんから学んだこと、共同保育所運動や養護学校義務化のための運動、共同作業所運動など、実声をあげ権利を獲得して

きたことを聞き、今当たり前にある制度や環境の背景を学びました。

仲間や家族、支援者などのねがいから制度や環境が整いつつありますが、講義内に紹介された優生保護法問題のように、今でも、人間としての権利を獲得するために運動をし続けている問題はいくつもあります。麦の郷は、日々出会い関わる仲間たちの生活を守ると同時に、社会構造の中にある矛盾に対峙し続け実践しています。

何かの行動を起こすことだけでなく運動の方法は様々だと思います。私は、違和感や矛盾に対して抱いた感情や考えを周りの職員と共有し、毎日の仲間と楽しいことや喜びを一緒に考え創り出し、その「場」を大切にすることも運動の一つであると思います。小さなモヤモヤや違和感は抱え続けるとしんどいことありますが、そのモヤモヤになった気づきを大切にし、その気づきから知ったものの責任として学びへとつながります。すぐにその学びが実感できなくても、明日その学びが実践につながります。今回の研修は、研修委員の私にとっても、改めて、日々の実践や運動へとつながる学びになりました。これからも、新たに仲間となった職員も一緒に、仲間たちや私たちみんなが意味ある生活を送れるように実践、運動をしていきたいと思っています。（ハートフルハウス創 圓山 歩実）

ソーシャルファームもぎたて表彰



第76回紀北食品衛生協会の総会が2024年5月22日、ホテルいとうで開かれ、施設の衛生管理、食品衛生管理向上への努力模範施設であることとし、ソーシャルファームもぎたてが表彰を受けました。また、優良従業員としてスタッフ達で話し合った結果、農産加工部より食品衛生管理責任者の資格を取得してくれたメンバーを推薦し、もぎたてメンバーを代表して表彰を受けてもらいました。さすが表彰ですので、普段なかなか見ないスーツに着替え、表彰会へ参加してきてくれました。表彰は嬉しい事で



はありますが、とても緊張したことと思います。資格を取得し表彰をうけた彼に、日々の中で少し責任感を持ち意識の向上が見られました。またそんな資格取得や表彰をうけるという経験は、周りのメンバーの意識向上にも繋がり、いつか自分も!!と気持ちを高めるメンバーも中にはいて、彼の経験が誰かのこれからの繋がること、誰かの希望になること、それが仕事への糧になること、そんな連鎖が素敵なことだと感じました。

(ソーシャルファームもぎたて 西浦 尚子)

不測の事態に備えて～麦の郷救命講習会～



4月18日麦の郷防災の日企画として、東消防署の協力のもと「救命講習会」を行いました。

今後起こりうる南海大地震のような災害時の救護

活動はもとより、突発的な病気やケガなどの“いざ”という時のために知識と技術を身につけておこうと15名の職員が参加し、心肺蘇生やAEDのみならず、三角巾を使った止血法や身近にあるものを利用しての簡易担架作製、骨折時の応急処置法も学びました。麦の郷の各施設は立地や構造も様々。「もしケガや病気で動けなくなったらどうすればいいの?」と様々な質問が飛び交う中、消防署の職員さんが丁寧に指導くださいました。とりわけ階段搬送は共通の課題。職員数名で椅子や毛布を使用し救護者(今回は人形)を運ぶのですが、さすが麦の郷の職員!というぐらい息もぴったりでした。

この講習会を通して職員同士も密接な連繫をはかれたのではないかと感じ、このつながりを増やすことが減災へと導くのではないかとつくづく感じました。
(六星舎 大畑 早織)

★農産加工場にホイストクレーンがやってきた！★

ジュース、ジャム等を製造する過程でどうしても煮沸作業が必要です。

今までは、仲間が手袋をはめて熱湯に手を入れ人力で重くて熱い製品を出し入れしてくれてましたが、今回作業場を拡張し、職場環境の改善をしました。



★仲間の感想です★

ジュースの熱湯消毒の仕事に、機械クレーンのおかげで、毎日毎日重い物を運ぶ体の負担がなくなりました。だいぶ楽に働く事ができました。ありがとうございます。

熱いところは、最初しんどかったです。腕が重かったです。 (北村 一豪)

(はぐるま共同作業所 ラ・テール 浦口 裕成)

ジュースやジャムのビンの熱い所は、強く出し入れしたら大事な商品が割れるので、慎重にビンを割らないように、ゆっくり出し入れしています。前はカゴが3つだけどクレーンでは4つだからやりやすかったです。クレーンが来てくれたので、うれしかったです。これからもクレーンの仕事したいです。 (山本 英雄)

私はビンの熱い所で仕事を3年間していて、肩と腰が痛くなりました。熱い所が新しくなることになり、工事中ずっと様子を見てました。工事が終わったらクレーンになりました。職員さんはクレーンの方法を教えてくれて、最初難しく感じましたが、慣れると簡単に出来ました。私はとてもうれしかったです。 (山路 青空)

麦の郷・はぐるまの障害のある市民と学生さんとのふれあい

和歌山リハビリテーション専門職大学の学生さん8名が6月にそれぞれ2日間ずつ、はぐるま共同作業所(製パン・製菓)とソーシャルファームピネル(クリーニング)で実習を行いました。地域の学生さん達に、知ってもらい、つながりを創り、理解を深めてもらうきっかけにと取り組んでいます。実習後、学生さんから感想をいただいたので、一部を紹介します。(表現を変えているところもあります。)

「暑い中仕事をしている利用者さんを見て、実習前と後で精神疾患の方に対する認識が変わりました。」

「麦の郷で働くスタッフさんの思いを教えて頂き、自分自身の考え方が変わりました。」

「施設内に保存してある昔の精神科病院で使用されていた有刺鉄線を見た時、昔は今より精神障害に対しての扱いが酷く、何をするか分からないという偏見から有刺鉄線で囲われた病院に収容したという

話を聞いて驚きました。」

「給料が少なすぎだと感じました。」

「皆さん優しく、困っている時は気づいて教えてくれ、心が温かくなりました。」

「様々な障がいがあり、重複されている方もおり、障がいがあっても自分の意志で前向きに仕事をしている姿がありました。やらされているのではなく自ら行動し、障がい者だからとか関係なく働ける場があることを知りました」

「発達障害の方と実際に会話をし、友人達と同じようにコミュニケーションができることがわかり、イメージが変わりました。」

作業所のみんなと同じように学生さんたちの事も愛おしく想うのは私が年齢を重ねたからかもしれないですが、麦の郷の職員として、私たち大人の「知らせる責任」の重要さを感じ、私も発達させていいただきました。(はぐるま共同作業所 北山 郁子)

むぎピース展 (7月3日~29日開催)



恒例となった作品展を、吹上にある“は〜とぎゃらり〜”にて開催しました。

個性あふれる作品に加え、むぎピースのなかま達や職員も一緒に作品を作り上げました。今年のテーマは“波”。大きな海(水色の画用紙)に手の平スタンプでペタペタ…波に見立てた巨大アートの完成です。みんなで力を合わせた合同作品作りは、本当に楽しかったです。足を運んでいただいた方々ありがとうございました。(むぎピース 谷口 かおり)

納豆のフィルム、知ってますか？



和の杜の看板商品「なっとく納豆」。2個のパック入り納豆がフィルムで包まれて1つの商品になっています。このフィルム、1つずつ手作業で巻かれているって知ってましたか？

フィルムを巻く職人の一人が床井さん。和の杜で16年働く彼が今までに仕上げた1つ10センチの納豆を横に並べると、なんと直線距離で麦の郷からあべのハルカスまで行ってしまうことに！

彼の仕事に、また彼がフィルムを巻く納豆を作っているなかまに頭が下がる思いです。

(はぐるま共同作業所 和の杜 大末 翔平)

NEW



ゆるさん&段子さんの
マスキングテープ
各種 ¥400 (税込)

うちのいちおし商品！「マスキングテープ」

お客さんの欲しいの声から生まれたマステ。第1弾は「さるかに」「ちょっとした和歌山弁」の2種類です。可愛い「さるかに」キャラにほっこり。そして「かだら気をつけよ」「ごうせやな」といたわりの和歌山弁が昭和な雰囲気さを漂わせ語られています。どちらも手紙や書類の封に使えば、相手も思わずニッコリかも。値段も400円とお手頃です。

他にもおすすめ商品が沢山。QRコードから見てみて下さいね。(megluck 閑林 泉)



MEGLUCK2023

Instagram

* むぎ・わくわくレポート 23 *

孤独を愛し、人が大好きな、たかさん

私たちは、「たかさんは、ひとりで作業をしたい孤独を愛す自閉症」と見立てていた。

でも、専門職である私たちの見立ては、まったくの見当違いだった。

megluck から移籍し創カフェで働くたかさんは、創カフェメンバーみんなの名前を覚え、帰るときに

「お疲れ様でした。〇〇さん、〇〇さん、〇〇さん…つぎ火曜日、お待ちしておりますませ〜」とみんなに声をかける。そして、順番が狂うとまた最初から「お疲れ様でした。〇〇さん、〇〇さん、〇〇さん…お待ちしておりますませ〜」と挨拶を繰り返して創カフェを去ってゆく。どんな重度な障害があっても人を求め、安心できる集団がいらないという人なんていないんだ。(megluck・創カフェ施設長 野中 康寛)

バスレクに行ってきました!!



7月12日(金)に和歌山県の福祉バスを利用し総勢22名で奈良に向かいました。

ミ・ナール内で昼食を食べて、いきものミュージアムへ。

イグアナ、トカゲなど普段見ることはない爬虫類にも触ってふれあうことができました。

金魚ミュージアムでは様々な種類の金魚が工夫された水槽で泳いでいる姿をみる事ができました。

参加者からはトカゲと遊べた、金魚がキレイで芸術的だったと感想がありました。

(和歌山生活支援センター 中田 智也)

福祉バスで神戸日帰りレクリエーションへ!



7月5日(金)に福祉バスで神戸にあるアトアと中華街へ、総勢21名で行って来ました!アトアはテーマ毎に表現された空間が新感覚の水族館。中華街では、お店でランチを食べ、その後自由散策をしました。とても暑いお天気でしたが、参加者からは「初めての経験ができてとても良かった。連れてきてくれてありがとう。」「アトアも楽しめてご飯も美味しかった。一緒に行って嬉しかったです。」と感想を聞くことができ、またひとつ、みんなの希望を実現できたことがとても良かったです。

(紀の川生活支援センター 石橋 由季子)

おとまり保育 (8月2日(金)、3日(土))

部屋のカレンダーを見て「あと何日?」「花火するん??」とみんなで楽しみにしていた「おとまり保育」。当日、体調不良で参加できない子どもがいて、みんなが揃っていないことにちょっと寂しい気持ちを感じている子どももありました。子ども科学館・クッキング・お楽しみ会と楽しい活動が続いても、だんだん外も暗くなってくるとお家に帰りたくなり、涙がポロリ。そんな時間もありました。花火をして、シャワーを浴びてパジャマに着替えて、いつもの友だちがいて、いつもの部屋で眠りにつきました。友だちと一緒になら初めての「おとまり」も安心して乗り越えることができました。

帰りのあつまりで、“よくがんばりました”とかけてもらったメダルを胸にお家の人のもとに帰っていく姿は、ひと回りもふた回りも成長した頼もしい姿でした。

(第二こじが園 野口 美加)



プールあそび



7月8日(月)に5歳児の子どもたちがたわしを使ってプール掃除し、プール開きをしました。暑い日が続く中、子どもたちは、大きいプールや小さいプールやタライと水が入っている所を行き来しながら、水のかけあいをしたり、バタ足、フニ泳ぎなど体を動かして遊んだり、おもちゃで水をすくって遊んだりと水の感触を全身で感じ、プールあそびを存分に楽しんでます。たっぷり夏ならではのあそびを楽しみ、秋以降のあそびにつながっていけばと思います。

(こじが園 滝本 容子)

『出張！漫才講座』を開催!!



7月22日（月）に漫才師のヤング 嶋仲拓巳さん、寺田晃弘さんを講師に迎え、『出張！漫才講座』をよりみち菊谷（かつらぎ町）で開催しました。

この講座のアシスタントとして司会進行を務めたのは、ゆめ・やりたいこと実現センターメンバーの三木将矢さん、宮里泰広さん、山畑頂平さん。また3人は、ヤングと共に即興漫才を披露してくれて、笑い熱気に包まれ大盛況に終わりました。三木さんは「心の底から楽しめた」、宮里さんは「またチャレンジしたい」、山畑さんは「緊張したけどうまくできた」と、清々しい笑顔で話してくれました。更に嬉しいことに、9月28日（土）の『障害者・市民の夏まつり』で漫才を発表することになりました！大舞台上で活躍する3人の勇姿をぜひ応援してくださいね。

（ゆめ・やりたいこと実現センター 尾方 千春）

円応教・紀の国教会より
ご寄附!

円応教・紀の国教会の皆様から、4万5千円のご寄附を頂きました。

毎年、教会内で募金活動して頂いたお金を、麦の郷に寄附して下さっています。

こども達の療育に必要な物品の購入等、大切に使用させて頂きます。

円応教・紀の国教会の皆様、本当にありがとうございました。

（ソーシャルファームピネル

山本 哲士）

第47回
障害者・市民の夏まつり

9月28日（土）に、和歌山城西の丸広場にて、障害者・市民の夏祭りが行われます。みんなが笑顔になれる祭りにしようと計画中です。みんな楽しんでひと時を過ごしましょう！

【注意】

今年は砂の丸広場を他団体が使用しているため、駐車場は近隣の駐車場をお願いします。

むきのひと



ソーシャルファームピネル
高松 真一

ソーシャルファームピネルの高松真一です。

ソーシャルファームピネルに、縁あってReスタート復帰して7年目となります。

ソーシャルファームピネルでは、①リネン（病院・介護施設等）のリネンサプライの洗濯（ホーフ、シーツ、枕カバー、タオルなど）②白衣・病衣などの洗濯・アイロン仕上げ③個人様の私物洗濯など、大まかに3つの部署が動いています。

施設長を始め、働き易い環境づくりという事で皆で日々、いろいろな形で実践しながら取り組んでいます。

夏場は、クリーニングという環境の中40度近い暑さになりますが、なかまの皆やスタッフも声掛けしながら調子を見守り、日々、業務と格闘しています！

また、施設設備の老朽化も進んでおり、なかまの皆も高齢化していく中、関係機関とも連携して取り組んでいきたいと考えます。

今後もソーシャルファームピネルを宜しく御願いと共、なかまの皆にも～お疲れ様!!～と一声頂ければと思います。